

仏教といのち

竹村 牧男（東洋大学）

今年に入って、大阪市立桜宮高校バスケット部の体罰問題が報道されたあと、女子柔道日本代表における体罰問題が世間に訴えられ、さらに全国のさまざまな体罰問題が明るみに出てきています。おそらく日本においては古来、体罰が当然のようになされてきていて、しかもあらゆる集団に浸透していて、払拭することは非常にむずかしいことと思われます。それだけに、この問題には社会全体が真剣に向き合い、取り組むべきだと思います。

体罰が問題になってから、新聞等では識者らによって、身体に関わる暴力は絶対いけないことである、という意見がさかんに表明されています。確かにこのことに間違いはありません。ただしこの問題の本質は、身体に関わるからではなく、それがまさに暴力であり、いわゆるハラスメントであるから、というところにあるのではないのでしょうか。

暴力は、けっして身体上においてのみ行われるわけではありません。仏教では行為について、身・語・意の三業と言いますが、言葉の暴力もありますし、実はその背景に心の暴力（害意）があることでしょう。いじめの問題は、まさに言葉の暴力・心の暴力です。体罰の背景にある本質的な問題は、身体においても言葉においても暴力をふるおうとする、その心のゆがみにあるのです。その根本は、他者とどう向き合うかの問題であり、そこから解決していかなければならないはずです。単に身体上で力を行使しなければよい、というようなことであるはずがありません。

唐突ですが、『法華経』には、常不軽菩薩という方が出てきます。この菩薩は、どんな人に対しても、「あなたは将来、仏となる方です」と言って合掌礼拝した方です。そのため、何を馬鹿な事を言うのだと、石を投げつけられたり棒で叩かれたりしても、難を避けつつ大声で、「あなたは将来、仏となる方です」と言い、ひたすら合掌礼拝するのです。この常不軽菩薩は、他のどんな人にも仏性というものはたらいっていることを見ていたのです。ですから、その仏性を拝んでいたと言ってもよいのかもしれません。

他者の人権を尊重するということは当然ですが、さらに他者も自己自身も、その個人を超える何らかに聖なるものに生かされていることを認識するとき、他者に暴力やハラスメントを加えることはけっしてできないことでしょう。おのずと深く合掌礼拝せずにはいられないでしょう。体罰を克服するにはそのように、近代的個人観を超えるいのちの深みを取り戻すことが、とても重要ではないかと思われてなりません。

近代的個人観は、個人を身体と意識されたかぎりの精神との合体であり、しかも個々に独立していて、個人はまったく自由であるというようなものでしょう。しかし19世紀半ば頃から、事物等の実体視に疑問が投げかけられ、関係主義的な世界観の開示や人間の無意識の領域の指摘がなされるよう

になりました。しかし仏教はつとに、無意識の世界もあらゆる存在の関係性も説いてきました。すでに岡野守也先生によって説かれたことと思いますが、唯識思想では、一箇の人間を意識下の第七末那識、第八阿頼耶識を含めて説明します。この阿頼耶識は刹那刹那、生じては滅し生じては滅ししながら、一瞬の隙間もなく相続されていくものです。そこに過去一切の経験が蓄積され、それらはのちの日常の経験に影響を及ぼしていくこととなります。そのあり方の中で、個人の内容は一瞬一瞬変化しながら相続されていくわけです。まさに動的平衡としてのいのちです。

しかもこの阿頼耶識は、単なる無意識としての心なのではなく、その中に有根身と器世間、つまり身体と環境を現じてそれらを相続させているものです。さらに種子、つまり未来の経験（感覚・知覚等）の因となるものも保持しているものです。この基盤において、いわば心が身体を焦点に環境と交渉・交流する、その総体として一箇の人間を見ているのです。一箇のいのちを、身体の内のみ限定して見るのではなく、主体と環境が身体を機関として交流するその全体に見ているのです。このことは、環境問題を考えるうえで、重要な視点を提供するものです。すでにアルネ・ネスも、個人を世界に拡充して自覚する立場から、ディープ・エコロジーを唱えました。仏教の場合、その個人の見方において、非連続の連続による相続という、徹底して実体論を否定する立場に立つことが顕著です。

この阿頼耶識には、さまざまな心理の要因が蔵されています。仏教の言葉でいうと、無明・煩惱の心の種子も保持されているのです。それらが現実には作用すると、その人に痛みをもたらす、苦しみ悩ませ、そのいのちを損ねることになります。そこで、それらが現実にはたらくことを抑え、よき心、仏教の言葉でいって善の心を発揮していくには、仏教の教えを聞く・思う・修するという、聞・思・修の実践が必要になります。まずは他者としての仏の側からの言葉、もしくは何らかのメッセージを受け取ることが、自己のいのちを損ねることなく、豊かにしていくことのきかけとなります。仏だけでなく、諸菩薩・諸尊、師や友達も、自己を導いてくれる存在になるでしょう。

と同時に、実はその人の内側から、真実の自己への目覚めをうながしているものがあるとも、仏教は明かしています。前に常不軽菩薩のことを紹介したときにふれた、仏性というものです。仏性の原語は *buddha-dhatu* であり、その *dhatu* はふつう「界」と訳される言葉で、因の意味であり、*buddha-dhatu* は「仏に成る因」という意味の言葉です。もっとも仏とは何かも問題ですが、仏教では、一人ひとりが仏と成ります。過去にたくさんの仏と成った方がおり、現在もたくさんの仏に成る方がおり、未来にもたくさんの仏と成るであろう方がいて、「三世十方多仏説」を採っています。その仏とは、唯識で説明すれば、八識のすべてが智慧に転じて、ただひたすらその智慧のみを発揮されている方ということになります。仏に成ると阿頼耶識は大円鏡智に、末那識は平等性智に、意識は妙観察智に、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識の五感の識は成所作智に転じます。これらの智慧は、おのずから他者の苦悩の救済にはたらくのであり、実に大智は大悲なのです。この四つの智慧が完全になって、ひたすら衆生済度に余念がない存在が仏なのであり、したがって我々はそうした諸仏から絶えず、あなたも苦しみをのりこえ、他者のためにはたらくようと、呼びかけ・はたらきかけを受けているという

のです。

ですから、仏性とはそういう四智の因のことにほかならないのですが、それは唯識で言えば智慧の種子（無漏種子）であり、いわば潜在的で、しかもこの唯識説は、その種子を持っている人と持っていない人がいると主張します。しかし『涅槃経』では、「一切衆生悉有仏性」と説き、あらゆる衆生が仏性を有していると説きます。このことが、『法華経』、『勝鬘経』等に説く一乗思想、すなわち、今、声聞や縁覚の小乗仏教において修行している人も、やがては大乗仏教に入って、大乘菩薩として修行して仏と成る、どんな人でも仏と成るといふ思想の背景にあるものです。だから常不軽菩薩は、どんな人に対しても、仏と成る方だと言って礼拝合掌したのでした。

私はこの「一切衆生悉有仏性」の説の基盤に、『華嚴経』の次の説があるものと思います。

仏子よ、如来の智慧・無相の智慧・無礙の智慧は、具足して衆生身中に在るも、但、愚痴の衆生は顛倒の想に覆われて、知らず、見ず、信心を生ぜざるのみ。爾の時に如来は障礙無き清浄の天眼を以て、一切の衆生を觀察したまい、觀じ已りて、是の如きの言を作したまわく、「奇なる哉、奇なる哉、云何んぞ如来の具足せる智慧は、身中に在りて而も知見せざる。我当に彼の衆生を教えて、聖道を覚悟せしめ、悉く永く妄想顛倒の垢縛を離れしめ、具さに如来の智慧其の身内に在りて、仏と異なること無きを見（さと）らしめん」と。如来は即時に彼の衆生を教えて、八聖道を修し、虚妄顛倒を捨離せしめたもう。顛倒を離れ已れば、如来の智を具え、如来と等しく、衆生を饒益す。

ここに、仏の智慧と同じ智慧が、一切衆生の内にも存在しているとの証言があります。とすれば、我々の個人は意識下の世界をたずさえているのみでなく、さらにその根底に、仏の智慧を有していたのです。このことを、「如来蔵」とも言います。人は、如来の胎児つまり因となるものを蔵しているという意味ですが、実はその胎児とは唯識で説く種子のことではなく、まさに煩惱に覆われた仏の智慧そのもののことなのです。したがって、この立場から「本覚」ということも言われます。この本覚（仏性）は、まさに覚のはたらきそのものとして、実は個人の内側から無明・煩惱にはたらきかけているという見方があります。このことを『大乘起信論』は、真如熏習という言葉で表わしています。

それだけでなく、おなじその真如・本覚が、一方では他者において自己実現を果たして仏と成り、その他者が外側から自己に対して本来のいのち＝仏性を実現するようはたらきかけているとも言います。とすればこの他者のはたらきは、実は自己の真如・本覚のはたらきでもあったのです。ここには、自己の意識を超えるいのちそのものが、今・ここのかげがえのない自己として、個としてはたらくと同時に、そこに無明・煩惱が介在して十分にその性能を発揮できないでいるがゆえに、内側からも外側からもその自己に本来の自己として実現するようにはたらいてきかけている、という事態が認められます。末那識は仏と成ると平等性智と転じるのですが、その平等性とは自他平等性のこと

で、自他はまったく同じ一つの本性（真如・本覚）を本質としていると見抜きます。もちろん、と同時に、自他はあくまでもそれぞれ今・ここのかげがえのないのちを生きています。いうまでもなくその自他は、関わり合い、支え合い、他者なしには自己も存立しえないでしょう。したがって、自己はもとより自他平等性かつ関係性のうちに存在していることになります。その関係構造の中で、個々のいのちは、その個を超える根源的ないのちによって、内側からかつ外側から、そのいのちそのものを無明・煩惱によって損ねないよう、本来のいのちのはたらきを実現するよう、うながされ、助けられているということになります。

その自他の関係性について無限に広がっていることを明かすのが、華嚴の世界観です。そのことは、因陀羅網の譬喩によって巧みに語られています。因陀羅とは帝釈天のことで、その宮殿には飾りの網が掛けられています。その網は、すべての結び目に宝石がくりつけられていて、互いに映し合っています。その映し合いの関係は、二枚の鏡を照らし合わせると無限に映し合いますが、それを多重（マルチプル）にした状態となって、重重無尽の関係性がそこに現前します。こうして、一即一切・一切即一かつ一入一切・一切入一から、一切即一切かつ一切入一切という実相が見えてきます。我々の個のいのちは、実にこの自他の重重無尽の関係性の中で、初めて存立しているものなのです。

しかもこの関係性は、けっして空間的のみではありません。時間的にもこの関係性があることは、華嚴思想の中に明かされています。たとえば、『華嚴経』が説く「初発心の時、便ち正覚を成ず」（仏道修行の最初に立った時、未来の終極の仏と完成している）との思想は、さまざまな意味を含んでいられるでしょうが、その背景に時間的な相即・相入の思想もあることでしょう。というわけで、自己は空間的に一切の衆生と関係しているのみならず、時間的にも過去の無数の衆生と関係しかつ未来の無数の衆生と関係しているのであって、そういうすべての他者に支えられて生きていることを、深く思うべきです。

唯識的に言えば、人人唯識で、一人ひとり八識であり、一人ひとり阿頼耶識を基盤として生きています。その阿頼耶識のうちには身体と環境が維持されているのですから、そういう総体としての個が、しかも空間的・時間的に無限の関係を織りなすなかに、一箇のいのちはあるということになります。しかもその根底に、根源的ないのち（真如・本覚、大智即大悲）がはたらいています。ここから、いのちのちのこを見直していくべきであり、このとき、前に見たような近代的個人観は根本的に見直されなければなりません。

このように、自己のいのちは、けっして身体と意識された限りの個体に閉じこめられたものではありません。自他平等性においては、究極の普遍の中にあり、自他関係性においては、空間的にも時間的にも重重無尽の関係性の中にあり、同時にまさにかげがえのない今・ここに生きています。あるいは生かされています。しかも根源的には、仏の智慧の実現へと、内側からも外側からも促されています。この仏の智慧とは、他者の救済にはたらくように、実は大悲を本質とするものでもあったのです。ということは、大悲に促されて大悲を發揮していくように存在しているのが、我々のいのちなのです。

道元は、「生死は仏のおんいのちなり」と言いました。その生死（個としての現実のいのち）が、尊くないはずがありません。ここを原点としてのいのちを見るとき、他者と自己とを合掌礼拝せざるを得ず、また他者と自己とを損ねないよう、本来のいのちの実現をめざしていけるよう、活動していくことにならざるを得ないと思われるのです。

了